

## 古い人を脱ぎ捨てなさい

2022/05/22

5だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および食欲を捨て去りなさい。食欲は偶像礼拝にほかならない。6これらのことのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下ります。7あなたがたも、以前このようなことの中にいたときには、それに従って歩んでいました。8今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。9互いにうそをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、10造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。11そこには、もはや、ギリシア人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隷、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられるのです。

皆さんが人生で探し求めているものは何ですか？なぜここにいるのでしょうか？あなたは根本ではどのような人ですか？このような問いやその他類似の問いの多くは「実存的な問い」と呼ばれています。人生の意味に関する「大きな問い」と考えてもよいでしょう。私たちが人間としてどのような存在であるのか、その核心を突いているのです。皆さんはこのようなことを考えたことがあるのでしょうか。人生の目的は何だろうと考えたことがありますか？何が自分を自分にしてしているのか考えたことはあるのでしょうか？このような問いをよく考えてみると、多くの方が人生の「大きな問い」について考えたことがないことに気づき驚くことでしょう。一方、この大きな問いが重要でないように思える人は、答えがない問いになぜそこまで熱中する人がいるのか、不思議に思うことでしょう。結局のところ、主がなぜ私たちを造ったか、何のために造ったかについて、具体的に書かれた命令書があるわけではありません。人間は皆、神の栄光のために造られていることは神の御言葉に明白に示されていますが、どのように歩むかは、隣に座っている人とは異なる可能性が高いのです。最終的にはこういった問いについて考えることに多くの時間を費やさなくても、私たちは皆、ある時点で自分の将来について熟考するものです。難解で実存的な問いでなくとも、どんな仕事がしたいのか、どこに住みたいのか、そんなことを考えることはあるでしょう。

ですからもう一度聞きましょう。人生で何を探し求めていますか？何を追い求めているのでしょうか。この問いに対して、より深い意味を求めて答えるかもしれませんし、現実的なことを考えるかもしれませんね。しかしどちらの場合でも、皆さんがどのように答えるのか、そしてさらに重要なことに、どのようにしてその答えにたどり着いたのか、それを考えてほしいのです。私がここで言いたいのは、私たちは皆、欲望や願望を持っているということです。目標や夢もあります。しかし、こういったものはどこから来たのでしょうか。

自分自身についてどう考え、何を追い求めて生きているのかを考えることは、とても大切だと言っておきましょう。コロサイ3:5-11で、使徒パウロはコロサイの人々に、キリストに属しているのだから、罪深い生活から立ち返るようにと呼びかけています。興味深いのは、パウロがコロサイの人々に、古い人を捨て、新しい人を着るようと呼びかけていることです。古い人

を捨て、新しい人を着るということは、クリスチャンになる前の私たちに何か問題があったのだろうかという疑問を引き起こします。私たちが根底ではどのような人間であり、どのような人生を望んでいたのか、そこになにか問題があったのでしょうか？

この質問に対する答えは複雑でしょう。まず、私たちの基本的な欲求は、神ご自身が人間の性質に入れられたものであると言えます。クリスチャンでなくても、安全に暮らせること、愛する人がいること、自活していくことが大切なことだと思うでしょう。一方、罪深い人間の間で優先されるものこそ、キリストと相反するものなのです。言い換えると、クリスチャンになったら、すべての情熱と欲望はキリストの影響下に入るはずですが、情熱と欲望を失うわけではありません。人生における現実的な疑問や「大きな問い」に対する私たちの答えが、三位一体の神の形で作り直されるのです。なぜここにいるのか？人生で何をすべきなのか？誰と結婚すべきなのか？どこに住めばいいのか？どんな仕事をすればいいのか？こういった問いやそれ以上の問いにクリスチャンは答えなければならないものです。しかし、答えを導き出す方法とその答えには、父と子と聖霊の刻印があるべきです。今日の聖句では、パウロの主張に二つの明確なポイントがあります。まず、5-9節で、パウロは私たちの古い性質として特徴づけられるものについて説明しています。

「5だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。6これらのことのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下ります。7あなたがたも、以前このようなことの中にいたときには、それに従って歩んでいました。8今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。9互いにうそをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、」

罪の一覧が二つあります。一つは5節にあり、もう一つは8-9節です。後にコロサイ 3:17で、パウロは言葉と行いの罪について述べていますが、ここでもその表現が当てはまると思われる。5節には、行いの罪があります。性的不道徳、不潔な行い、情欲、悪い欲望、貪欲などです。そして、パウロは、これらの罪深い行為について、追加で要約した説明を付け加えています。パウロは貪欲は偶像崇拝であると言っていますが、「偶像崇拝である」という表現は、貪欲以外のことにも拡張できるでしょう。この箇所の日本語訳を見ると、もう少しわかりやすいと思います。パウロは「貪欲は偶像礼拝です」といっています。ここで特に興味深いのは、この罪の一覧には貪欲を含む3つの「欲」があることです。つまり、これらの罪は根底でつながっているのです。これらの罪の行為は、勝手に起こるものではありません。私たちは罪ある行為の傍観者なのではなく、これらの罪は私たちの内側から生じるのです。この罪の焦点は、本質的に自分自身にあるのです。その行為自体が罪であるだけでなく、他のすべてのものよりも自分自身を優先させたいという願望から生じています。これが「偶像崇拝」です。普段、偽りの神を崇拝することを偶像礼拝と考えますが、神の御心よりも自分の欲望を優先させることは、自己崇拝の一形態です。あなたの人生の本当の主導権は誰にあるのでしょうか？究極的には神が支配しています。しかし、私たちが神の律法よりも自分の欲望を優先させるとき、それは神の支配にあらがっていることになるのです。神は偶像礼拝を忌み嫌われます。旧約聖書には「神は嫉妬深い神である」と何度も書かれています。通常、嫉妬は他者が自分より多くのものを持っているとか、自分が他の人と同じものを持つのが当然であるといった感情と関係がある

ため、悪いことだとされています。しかし、神についてはまったく状況が異なります。神は賛美されるにふさわしい方です。ですから、私たちが自分を持ち上げて神様と競争するとき、コロサイ 3:6には「これらの者のために、神の怒りが来る」と書いてあるのです。

それでパウロは、コロサイの人々に、これらの罪深い行いを捨て去る（英語訳では殺す）ように召しているのです。これは、場違いだと思えるかのような暴力的な表現です。なぜ、何かを殺そうとするのでしょうか。しかし、罪のために神の怒りがこの世に及んでいることを考えると、パウロが「クリスチャンはこういったものを取り除く必要がある」と言っている理由がすぐに理解できます。パウロは、コロサイの人たちも「かつては」これらの罪深い行いの中を歩んでいたと言っています。彼らはこの世の一部でしたから、この世がしたようにしました。しかし今、彼らはこういったものを殺さなければなりません。それを踏みつぶす必要があります。根絶やしにするのです。さて、この罪深い行為にパウロは 8-9 節を付け加えます。

「8今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。9互いにうそをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、」

この節でパウロは、私たちの話し方に注目しています。罪深い言葉に対抗するために、パウロは、それらを捨てる、取り除くべきだと言っています。行動で古い人を脱ぎ捨てるだけでなく、嘘をつく舌や、言葉によって人を悪く扱うどんなことをも捨て去りなさいというのです。このパウロの狙いは明らかでしょう。コロサイ 3:1-4 でパウロは、クリスチャンは上にあるものに目を向けなければならない、つまり、自分の人生を神に向けなければならないと言っています。もし、人生が神に向けられたなら、神の怒りを招くようなことに戻ることは考えにくいでしょう。クリスチャンがこういった罪深い欲望を止め、殺すようにとされているのは、非常に理にかなっていますが、ここで私たちは最初の疑問に立ち戻ることになります。もしクリスチャンが古い罪深い欲望を断ち切らなければならないとしたら、私たちが望んでいた他のものはどうなるのでしょうか。人生設計は、どの程度罪深い欲望に影響されていたのでしょうか？それは望んでいたものによるとは思いますが、一つだけ理解すべきは、人生に何を求めているのかを深く考えなければならないということです。私たちがクリスチャンになったとき、私たちは死から救われ、いのちへと導かれました。私たちは、罪の束縛（奴隷）の中にいました。罪が私たちを支配していたのです。しかし今は、信仰による恵みによってキリストのうちに新しいいのちをいただいているので、私たちは自由です。けれども、以前私たちを非難したものに戻る自由はありません。私たちの人生の計画は、キリストの影響下に置かれるべきなのです。私たちは神の子であり、世の塩であり光であり、栄光の王の使者であるという基本的な真理に照らして、人生計画を検討すべきなのです。他のすべての計画は、私たちの主の超越した栄光に比べれば、かすかに輝くだけです。そして、12-17 節でクリスチャンがどのようにそれを行うかを見ていくと、その方法は非常に自由であることがわかります。しかし、ここで言えることは、罪深い欲望を殺すことによって、私たちの人生の願望は別の型に再鑄造されるということです。その型は、私たちの人生に起こった深い変化を反映するものです。

9 節の終わりでパウロは、古い人を脱ぎ捨て、10 節で「造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。」と述べています。私たちの知識や欲望が新しくなっているのです。これはパウロの主張の重要な部分だと思えます。パウロは、私たち

がすでに完全に適合している、あるいは完全に新しくされたと言っているのではありません。今、新しくされているのです。この刷新は、新しい知識という形でもたらされます。福音と御言葉の真理は栄光であり、人生を変えるものです。古いものを捨て、神によって示されたものを理解しようとするとき、私たちの心は新しくされます。しかし、この刷新は特定の形を持っていることに注意してください。私たちの心は、創造主の姿に倣って、知識において新しくされるのです。それで私はこの説教で、私たちの人生の目標と願望との関係を示そうと努めたわけです。クリスチャンの心・精神は救い主の姿に作り変えられます。パウロの頭にあったのは、教会におけるクリスチャンの人間関係です。11節でパウロは、「ギリシア人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隷、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられるのです。」と言っています。私たちが自分を識別し、世界に自分を適合させるために用いる大きなものが、キリストにおいては私たちを分裂させる効力を失うのです。文化的、霊的な大きな隔たりも、社会的地位も、クリスチャンとしてのアイデンティティを左右するものではありません。パウロがここで力説していることのポイントの一つは、ユダヤ人が非ユダヤ人との交際を、自分たちの純潔を汚すものと考えていたことです。異邦人と一緒に食事をするのはもちろん、長い時間一緒にいることさえも違法だったのです。多くのユダヤ人にとって、ユダヤ人と異邦人の間の溝は広すぎて越えられなかったのです。パウロが言いたいのは、キリストにある人は皆、イエスの名と守りのもとにあるのだから、人と人を隔てるものはすべて取り除かれるということです。キリストはすべてであり、すべての中におられます。私たちの生き方、人生の中で追い求めているものは、主イエスという一人の人を中心とします。

では、クリスチャンになったからといって、自分自身やアイデンティティを失うことはないのでしょうか。これは重要な質問です。私たちの心はすべて創造主の姿に倣って新しくされますが、私たち皆が同じところから出発するわけでも、人生で同じ使命を与えられるわけでもありません。このことを説明するには、聖霊が聖書の著者たちにどのように靈感を与えたかを思い起こすのが一番です。聖書には、約40人の人間の著者がいるので、様々な語彙、文法、文体、ジャンルが存在します。しかし、聖書そのものが神の御言葉という証であることに変わりはありません。聖書における靈感は絶対に欠かせないものですが、人間の著者を用いるにあたって、神は個人をつぶされることはありませんでした。ですから、これほど高く、貴重なものにおいて神が聖書の著者の個性を排除しなかったとすれば、クリスチャン生活において、私達がさまざまな道を追求することを神が許される可能性は高いと言えないでしょうか。私には、それがとても自然なことに思えます。神がエデンの園を造られたとき、アダムに神を礼拝するための神殿を建てよとは言われませんでした。神はすでに聖域を造っておられたからです。神はアダムに、「産めよ、増えよ、地に満ちよ」と言われました。そして、被造物を従わせ、地を世話するよう言われました。私たちは皆、同じ働きをするようには造られていないので、召しや賜物はそれぞれ違います。これは教会でも世界でも同じです。私たちは、志を追い求め、自分の賜物を生かして物理的な必要を満たす一方で、クリスチャンの生活は救い主をますます意識するものでなければならないと考えるべきです。つまり、私たちがすることすべてが礼拝の色合いを帯びているべきなのです。私たちがしようと望むこと、しようとすることは、すべて天に目を向けてなされるべきです。

しかし、私たちが自分の罪深い欲望を満たそうとするとき、実に自分の思いを神の御心に対抗させているのです。自分の思いを神と戦わせることで、偶像崇拜をしていることになります。

このように自分を甘やかすことは正しいことのように見えるかもしれませんが、罪は私たちを欺きます。罪は喜びや力、利益を約束しますが、それが実際にもたらすのは苦痛です。神との関係も、周りの人たちとの関係も壊します。それが我々の人生に共通して与えられる神の恵みを軽視させ、他者との関係に疑いを生じさせることから、罪から得られる一時的な喜びや益は常に損なわれるのです。罪深い欲望は私たちに嘘をつき、約束したものを決して実現しません。しかし、私たちはそのような内なる衝動に耳を傾けることに慣れてしまっているのです、自分のやり方を変えるよう召されなければならないのです。

このパウロの召しは、私たちにとって非常に不自然なものです。私たちは罪の中に生まれ、適切な指導を受けなければ、それが私たちの知っているすべてです。ですから、私たちのうちにある地上のものを死に至らしめるために、私たちの人生には神の恵みが必要なのです。互いへのあらゆる罪深い話し方を取り除くために、イエスの姿に倣って心を新しくする必要があります。私たちは、神の方法が世の中の方法よりも優れていることを信頼するために、聖霊の力を借りなければなりません。

罪は常にドアの前にうずくまっています。罪は、私たちに襲いかかり、打ち倒そうと待ち構えているのです。しかし、キリストがおられる上にあるものに目を向ける人は、真理に繋ぎ留められるためのものを持っています。ですから、働いているか、結婚しているか、勉強しているか、引退しているかどうかにかかわらず、あなたの人生のビジョンは異なっているのです。人生では多くを得るものですが、私たちの主たる焦点は、人生から何を得られるかということではありません。私たちの主たる焦点は、私たちの救い主の御名と栄光なのです。

マタイ 6:33 「33 何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」

コリント第一 10:31 「31 だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」